

欧州経済史

矢後 和彦 教授

1. 担当教員の専門分野（研究領域）・現在の研究テーマ

①フランス経済史 フランスにおける大衆貯蓄の収集と運用の機構を解明してきた。貯蓄収集機関としては都市を中心に展開した普通貯蓄金庫および郵便局を窓口とする国営貯蓄金庫をあつかい、運用機関としては準公的金融機関として設立された預金供託金庫をとりあげ、中央銀行政策や財政金融政策との関連さらには社会政策・社会思想との相関を追求した。その成果は『フランスにおける公的金融と大衆貯蓄』（東京大学出版会、1999年）にまとめられた。

②国際金融機関史 国際決済銀行の業務と組織を歴史的に検証した。欧州を中心に展開した中央銀行間協力の発展過程、国際金融システムの転換への対応、国際機関としての組織的課題への応答、また国際決済銀行に影響を与えた経済思想の展開を追跡した。その成果は『国際決済銀行の20世紀』（蒼天社出版、2010年）に集成された。また科学研究費共同研究に係属してIMF・世銀等の国際機関の歴史研究にも従事している。

③国際銀行史 19世紀末に創業したフランス資本のロシアの国際銀行・露清銀行（および後身の露亜銀行）について研究している。当該銀行に表現された金融システム、グローバル経済、中国・日本をふくむ極東アジアの地域経済、さらには組織、財務、企業文化の歴史的構造を解明することを課題としている。

2. 指導方針

ヨーロッパ諸地域の経済史を中心に、経営史・金融史・社会史などの幅広いアプローチを理解することを目指す。経済史に関する内外の最新の研究成果を摂取した上で、各自の研究テーマに即した一次資料の検証へと進む。受講生は現地調査を踏まえて一次資料を渉猟して、本格的な経済史研究を推進する。そのため資料の解読方法、歴史研究の叙述方法、外国語論文をふくめた成果の取りまとめ方法等も指導する。博士課程では海外での学会報告も展望する。

3. 学生に対する要望・その他

研究対象国の言語を習得し、読解のみならず作文・会話について高度なレベルに達することが要求される。何よりも根気と情熱をもって資料にあたり、新しい歴史像を提起することが期待される。研究テーマについては受講生と相談するが、ヨーロッパを中心にアメリカ、アジア諸地域の経済史・経営史が中心となる。